

祭礼と祭衣装

—唐津くんちを中心に—

山崎 智子

[指導教員：武庫川女子大学教授 奥野温子]

1. 研究の背景

古来より、日本では多種多様な祭礼が執り行われてきた。「新嘗祭」のように、国家規模で重大な意味をもつものから、「盆踊り」のような庶民の間で広まり親しまれてきたものなど、形式や宗教など様々である。

その中で華やかさや独自性から、全国的に注目されるようになってきた祭礼もある。そのひとつに、佐賀県唐津市の「唐津くんち」がある。人口約13万人の唐津市だが、「唐津くんち」期間中は約50万人が訪れ、年々知名度も参加者も増加の一途を辿っている。

「唐津くんち」最大の華は、14台の曳山（ヤマ）と呼ばれる豪華な漆塗りの大きな出し物だが、この曳山同様、鮮やかで目をひくのが祭衣装である。「唐津くんち」の祭衣装は、曳山に負けず劣らず華やかでありながら、決して曳山の邪魔をせずむしろ引き立て、祭礼をより一層華やかに彩っている。このような「唐津くんち」の魅力ある祭衣装の奥深さに惹かれ、祭礼と祭衣装について調査を行い、多くの人に「唐津くんち」の魅力を知ってもらいたいと思い本研究に着手した。

2. 研究方法

唐津くんちの祭礼と祭衣装の歴史や変遷について、文献調査を中心に調査を行った。その後、「唐津くんち」とその祭衣装について、2013年8月と11月に現地に赴き、聞き取り調査を実施した。なお、11月には「唐津くんち」の祭礼に参加し、現地検分を行い、資料の収集を行った。

また日本全国で執り行われている祭礼から、「唐津くんち」の曳山制作に影響を与えたといわれている、「京都祇園祭」と、「唐津くんち」と同時期に始まったとされる「岸和田だんじり祭」についても調査を行い、「唐津くんち」との比較検討を行った。

3. 「唐津くんち」

「唐津くんち」は、佐賀県唐津市にある唐津神社で毎年11月2日～4日に執り行われる秋季例大祭であり、1980年（昭和55年）には、『唐津くんちの曳山行事』として国の重要無形文化財に指定されている。「唐津くんち」の御神輿御神幸は、寛文年間（1661年～1672年）に始まったとされるが、曳山が巡行するようになったのは、1819年（文政2年）に1番曳山・赤獅子が唐津神社に奉納されて以降である。

キーワード：唐津くんち、曳山、長法被、肉襦袢、半纏

3-1. 「唐津くんち」の曳山

「唐津くんち」の曳山（図1、図2）は、1819年（文政2年）に1番曳山が製作され、1876年（明治9年）までに15台製作されている。その内、現在は14台が現存し、「唐津くんち」の際に巡行に参加している。最も重いものは、3tあるといわれており、巨大な曳山が細い道を見事に駆け抜ける様子は、まさに圧巻の一言である。

14台の曳山は、和紙を重ねた上に色鮮やかな漆を塗って作られており、1番曳山から順に『赤獅子』『青獅子』『亀と浦島太郎』『九郎判官源義経の兜』『鯛』『鳳凰丸』『飛龍』『金獅子』『武田信玄の兜』『上杉謙信の兜』『酒呑童子と源頼光の兜』『珠取獅子』『鯨』『七宝丸』である。これらは御神輿のお供として「唐津くんち」に巡行する。



図1 2番曳山・青獅子



図2 9番曳山・武田信玄の兜

3-2. 唐津くんちの祭衣装

祭衣装には“法被”“半纏”とよばれる衣装がある。現在、両者はほとんど区別されていないが、ルーツは全く異なる。

“法被”は、幕府が財政難に陥っていた江戸時代中期、下級武士や雑兵が貴重な反物を節約するために“羽織”の代用品としてつくられたのがはじまりである。一方“半纏”は“法被”がつくられたのとほぼ同時期に、1反から2着つくられる衣服として、庶民の間で広まったといわれている。

このように、本来“法被”は武家関係者、“半纏”は火消しや商人・職人といった庶民が着用するものであった。この違いは形状にも現れており、“羽織”の代用品としてつくられた“法被”は、袖の袂がない・胸紐があるなどの特徴がみられる。一方、“半纏”は、職人が仕事をしやすいように袖丈が短く胸紐がないなど、当初は“法被”と“半纏”は別物であったのが、江戸時代末期頃には、ほとんど違いが無くなったといわれている。

(1)肉襦袢(にくじばん) 「唐津くんち」では、“法被”や“半纏”と呼ばれる祭衣装を“肉襦袢”と呼んでいる。通常“肉襦袢”とは演劇、特に歌舞伎において、役者が肌を現すときに用いる肌ぴったりとした肉色の襦袢であり、「唐津くんち」の“肉襦袢”とは全く異なるものである。“肉襦袢”の特徴は、素材が絹の羽二重ということである。「唐津くんち」の祭衣装には色鮮やかなものが多いが、絹が染色性のよい繊維であることも要因のひとつではないだろうか。しかし、絹は雨(水)で傷む・高価・手入れが大変などの理由から、近年は、絹と合成繊維を混紡してつくられた“肉襦袢”も増加している。

また、凝った絵が描かれたものが多いのも“肉襦袢”の特徴である。例えば、6番曳山・鳳凰丸(図3)を保有する大石町の“肉襦袢”(図4)には、舞う鳳凰がえがかれている。



図3 6番曳山・鳳凰丸



図4 大石町の肉襦袢

(2)長法被(ながはっぴ) “長法被”は“肉襦袢”の上からはおる衣装であり、「唐津くんち」は11月に執り行われるため、本来“長法被”は、年配の曳子ために防寒着としてつくられたものである。そのため“長法被”は、若い曳子がお洒落として着ることを防ぐために木綿でつくられたものが多かったそうである。しかし、現在は年齢に関係なく“長法被”は着用され、色やデザインもそれぞれ趣向の凝らされたものが多い。例えば、13番曳山・鯨(図5)を保有する水主町の“長法被”(図6)は、大きな『鯨』の字と、数本のラインが入ったシンプルなものだが、このラインは水主町の地図になっており、派手ではないが、水主町の人々の細やかなこだわりが垣間見える“長法被”となっている。



図5 13番曳山・鯨



図6 水主町の肉襦袢¹⁾

4. 「京都祇園祭」と「岸和田だんじり祭」の祭衣装の比較

「京都祇園祭」は京都府の八坂神社(祇園社)の祭礼で日本三大祭りのひとつに数えられる。

また、「岸和田だんじり祭」は大阪府岸和田市にある岸城神社の祭礼である。

(1)「京都祇園祭」の祭衣装 「京都祇園祭」の祭衣装(図7)の素材は麻である。これは、麻が吸湿(水)性に非常に優れ、接触冷感もある繊維であり、高温多湿の夏の京都にぴったりだからだろう。また、最大の特徴は、形状そのものが町毎により異なる点であり、これは他の2つの祭礼には見られない特徴である。

(2)「岸和田だんじり祭」の祭衣装 「岸和田だんじり祭」の祭衣装(図8)の素材はブロードで、「京都祇園祭」同様落ち着いた色合いでシンプルなものが多い。「岸和田だんじり祭」の“法被”の背中には、それぞれの町の町紋が大きく書かれており、それを引き立たせるために、落ち着いた色や伝統的な絵柄が多いのではないと思われる。



図7 「京都祇園祭」の“法被”²⁾



図8 「岸和田だんじり祭」の“法被”³⁾

4. まとめ

運動性・機能性に優れた衣服が多く存在する現在でも、祭礼では伝統的な祭衣装が着用され続けている。それは、見る者を楽しませてくれるデザインの凝ったもの、シンプルだからこそ主役を引き立てるものなど、それぞれの祭礼に相応しい色やデザインの衣装を着用することで、祭礼特有の雰囲気や絆、団結力が生まれるからではないだろうか。

祭礼は、町と町・人と人の絆を深めるものでもあり、自分たちの住む地域や受け継いできた伝統に、誇りをもつことにも繋がっているのだと強く感じるようになった。多くの人々の思いが込められているからこそ、祭礼は途絶えることなく受け継がれ、人々を惹きつけてやまない根源だろう。

参考文献

- 1)フリーマガジンぷちトラ, <http://www.geocities.jp/karatsunet/kunchi/multi/mobile3.html>
- 2)京都・祇園祭りボランティア 21, ボランティアメモ帳, <http://gionmatsuri.jp/volunteer/volu-manu/manual3-1.htm>
- 3)岸和田市 HP, 岸和田地区ハッピー紹介, <http://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/danjiri/happ-kishiwada.html>